Veritas No.27(2004.12.20)

目次　　（敬称略）

＜書物をもって友と会し･･･＞
浜下　昌宏（図書館長）

＜特集　同窓生文庫＞
同窓生文庫開設
同窓生文庫リスト
≪本との出合いのかげに≫松岡享子

＜研究室から＞
西田　直孝

＜図書館員の推薦図書＞
井出　敦子

＜「原千恵子写真展」によせて＞
井原　麗奈

＜オルチン文庫にある「讃美歌集」について　その十(最終回)＞
茂　　洋

無断転載を禁ず

＜書物をもって友と会し･･･＞

浜下　昌宏　図書館長　総合文化学科教授

中国古代の歴史家荀悦（じゅんえつ）（148－209）の言葉に「文をもって友と会し」とあるが（汪涌豪『中国遊侠史』鈴木博訳、青土社、2004）、この場合の「文」とは教養とか学問知識のことであろう。この表現を借りて私は「書物をもって友と会し」と語ってみたい。考えてみると私がたまさかに友を見出すのは、小さな頃から＜書物を介して＞だったように思う。知人の部屋に入るときまって書棚の本を眺める。それを見れば、その人の関心や教養の程度がわかる。外国での友人づきあいも書物を介してであった。Edinburgh でお世話になった Peter Jones 教授のお宅へはよくパーテイに招ばれたが、英会話がさほど得意でない私には、ゲストたちのおしゃべりについていけなくなると書棚を眺めていた。天井までぎっしりとつまった書棚にはプラトンからドストエフスキーまで、私の馴染みある本で埋まっており、ときにそうした本が話題になった。あるときは教授秘蔵の皮装古書のコレクションを特別に見せてくれたが、その中にはマキャベリの『フィレンツェ史』の早い英訳（17 世紀か遅くても 18 世紀のものであろう）があり、私が「これは日本語訳もありますよ」と言ったら教授は驚いておられた（岩波文庫に入っていたのだが、今は絶版かもしれない）。ところで私は、先に 10 月 7 日から 12 日まで上海に出かけたが、嬉しい予想はずれで友を得て帰国した。上海社会科学院主催の会議に招待された 3 人の外国人の一人であった彼はロシア人で（残りの二人はイギリス人と私）、専門はロシア文学研究ということであったが、どういうわけか日本文学についての知識もあり、会議終了後の蘇州郊外の古い寺院の見学の際には、突如「ダイトクジ！」（大徳寺）などと言い出したりした。「わび」「さび」は言うにおよばず、紫式部、清少納言、それから「もののあはれ」と本居宣長、といった名にも通じていた。彼の周辺に日本学者が多くいるようだった。夕暮れの太湖の舟遊びの甲板から、かつての日本の文人たちの蘇州への憧れなどを話すと、そんなときでも「私は芭蕉や西行が好きだ」と語り「日本へ行くことがあったら田舎を回りたい」と言う。いつも同じ T シャツを着ており、放浪詩人の風であったので、上海に渡った金子光晴のことを話してやり、また、あなたにふさわしい日本語を教えてやろう、と「無頼」という言葉を覚えさせた（中国語では意味を異にするらしい）。上海を出発する最後の晩、夕食代わりの（昼食の大ご馳走のおかげで二人とも満腹だった）パウンド・ケーキとビールと中国酒とを買い込んでホテルに戻り、小さなスイート･ルームの付いた彼の部屋で酒盛りを始めた。マルクス主義や共産主義や中国やヨーロッパ、その他その他の話題で話し込んだ。私のロシア文学に対する深い愛着と敬意も披瀝して、ドストエフスキーやチェーホフは言うまでもなく、スターリン体制の犠牲者だったマンデリシュターム、アンナ・アフマートワ、パステルナーク等々の詩人たちのことも語り合い、そして変則的ながら連歌を教えてやろうと、「文化大革命」の題で”お手本”を見せるべく私は英訳しながら「唐子た

ち/ 日韓の慕華を背負って/ 狼藉尽くす」と詠じた。今回の旅で連れていただいたどの寺院でも、文化大革命時の破壊について案内の僧侶から聞かされたからである。翌朝別の会議のために朝５時起きという彼の部屋を出たのは夜中の２時過ぎであった。

＜特集　同窓生文庫開設＞

神戸女学院は明治８(1875)年、アメリカからやって来た２人の婦人宣教師によって、神戸山本通りに「女学校」として創立されました。一貫したキリスト教主義女子教育を目指して、今日まで 129 年の歴史のなかで多くの卒業生を送り出してきました。そして彼女達はいろいろな方面に活躍の場を広げて、いろいろな業績を残してきています。その活動の中に多くの著作をみる事ができ、それらは社会学、心理学、芸術、言語学、文学と多方面にわたっています。その多くの著作を散逸させる事なく保存していくために、これまでの所蔵の中から、また新たに収集して同窓生文庫として図書館本館にまとめる事となりました。一部は閲覧室書架に展示して、広く学生さん方にも知って頂きたいと思います。スタートに伴い、今回は文学のジャンルから数名の方の作品をリストアップしました。

同窓生文庫リスト（抜粋）

大橋善恵　（女 55E58）

訳書	かっこうの木	ジョーン・エイケン／著	（富山房　1980）
	ぬすまれた湖	ジョーン・エイケン／著	（富山房　1989）
	バターシー城の悪者たち	ジョーン・エイケン／著	（富山房　1976）

他

釜谷かおる（玉岡かおる　大 S96）

著作	をんな紋　三部作	（角川書店　1997）
	クォーター・ムーン	（新潮社　1993）
	神戸ハートブレイク・ストリート	（大和書房　1994）
	サイレント・ラヴ	（新潮社　1992）
	水晶婚	（講談社　2001）
	天涯の船　上・下	（新潮社　2003）
	夢食い魚のブルー・グッドバイ	（新潮社　1989）　他

河本祥子（75）

著作　おかあさんになったりすのちび　（福音館書店　1987）

マフィンおばさんのぱんや　竹林亜紀／作　（福音館書店　1981）

訳書　りすのクラッカー　ルース・エインワース／作（福音館書店　1982）　他

田中久子（福井久子　大 E69）

著作　形象の海　詩集　（編集工房ノア　1999）

詩集　海辺でみる夢　（人文書院　1956）

鳥と蒼い時　（思潮社　1973）

福井久子詩集（日本現代女流詩人叢書　第４集　（芸風書院　1983）　他

五明美和子（菊地美和子　女 47050）

著作　詩集　たそがれ地方　（昭森社　1938）

詩集　噴水のほとり　（花神社　1979）　他

延原泰子　（大 E77）

訳書　オフィーリアは死んだ　P.M.カールソン／著　（扶桑社　1987）

キルジョイ　アン・ファイン／著　（Mysterious Press　1989）

黒と青　イアン・ランキン／著　（早川書房　1998）

ケネディ家の女たち　上・下　ローレンス・リーマー／著　（早川書房　1996）

シンプルな豊かさ　上・下　サラ・バン・ブラナック／著

（早川書房　1998-2001）

遠い夜明け　ジョン・ブライリー／著　（早川書房　1988）

目撃者を捜せ！　パット・マガー／著　（東京創元社　1988）

誘惑者　ジェラルド・ペティヴィッチ／著（早川書房　1993）

他

森恭子　（Kyoko　Mori　92）

著作　The dream of water　（One World/Fawcett Columbine Book　1995）

Polite lies　（Henry Holt）

Shizuko's daughter　（Ballantine Books　1994）

Stone field　（Metropolitan Books　2000）　他

他の同窓生文庫リストは＜図書館からのお知らせ＞本館をご覧下さい。

今回同窓生文庫開設にあたり、皆さんも良くご存知の多くの著作を生み出しておられます松岡享子さんにご寄稿頂きました。

プロフィール　：　神戸女学院大学英文学科、慶応義塾大学図書館学科卒業後、1961 年渡米。ウェスタンミシガン大学大学院で図書館学を専攻の後、現地の公立図書館で勤務。帰国後 1967 年より自宅にて家庭文庫開設。児童文学の創作、翻訳、研究を続け、1974 年石井桃子らと共に財団法人東京子ども図書館を設立し、現在理事長を務める。

著作リスト（同窓生文庫リストより抜粋）

著作	絵本を読む		（東京子ども図書館　1973）
	お話とは		（東京子ども図書館　1974）
	お話について		（東京子ども図書館　1996）
	おふろだいすき	種田有子／絵	（福音館書店　1971）
	かえるがみえる	馬場のぼる／絵	（こぐま社　1978）
	子ども・こころ・ことば		（こぐま社　1985）
	サンタクロースの部屋		（こぐま社　1978）
	それ　ほんとう？	長新太／絵	（福音館書店　1973）
	ちいさなたいこ	秋野不矩／絵	（福音館書店　1988）　他
訳書	うさこちゃんおとまりにいく	ディック・ブルーナ／文・絵	（福音館書店　1993）
	おばかさんのペチューニア	ロジャー・デュボアザン／作・絵	（佑学社　1978）
	おやすみなさいフランシス	ラッセル・ホーバン／文 ガース・ウィリアムズ／絵	（福音館書店　1967）
	かしこいビル	ウィリアム・ニコルソン／作	（ペンギン社　1982）
	くまくんのおともだち	E.H.ミナリック／文　モーリス・センダック／絵	（福音館書店　1972）
	くまのパディントン	マイケル・ボンド／作　ペギー・フォートナム／画	（福音館書店　1991）
	くまのビーディくん	ドン＝フリーマン／作	（偕成社　1976）
	さるのオズワルド	エゴン・マチーセン／作	（こぐま社　1998）
	しろいうさぎとくろいうさぎ	ガース・ウィリアムズ／文・絵	（福音館書店　1966）
	ねずみのいえさがし	ヘレン・ピアス／作	（福音館書店　1970）

ヘンリーくんと秘密クラブ	ベバリィ・クリアリー／作	（学習研究社　1975）
ものぐさトミー	ペーン・デュボア／文・絵	（岩波書店　1977）
ゆうかんな女の子ラモーナ	ベバリィ・クリアリー／作	（学習研究社　1976）　他

≪本との出合いのかげに≫

松岡享子（大 E74）　財団法人東京子ども図書館理事長

児童図書館員を志す若い人たちに、私のこれまでの歩みをお話しする機会ができて、その準備のために、このところ何ヶ月か、意識的に“昔”のことをあれこれ思い出していました。すると、昔はなんとも思わなかったことで、ふしぎだな、どうしてああだったんだろう、と思うようなことが、いくつか出てきました。

そのひとつは、女学院の大学図書館の開架書架に、当時刊行がはじまって間もない岩波少年文庫がかなりの数並んでいたことです。また、児童文学に関する英米の参考書も、主要なものが何点か揃っていました。いったいだれが、だれに読ませようと選んでいたのでしょう？五〇年近くも前のことで、もちろん大学に児童文学の講座はなく、それが大学での研究のテーマになるなどとは、当時はだれも考えていませんでした。私の知る限り、個人的に児童文学に興味をおもちの先生もいらっしゃらなかったと思います。

今から考えるとふしぎですが、とにかくそこに本があったおかげで、私は指導教授なしに、独断でイギリスの児童文学を卒業論文のテーマに選び、それらの参考書の助けを借りて論文を書き上げました。そして、その過程で、目に止まった「図書館」ということば――それらの書物の発行元のひとつが「アメリカ図書館協会」であったり、著者のひとりが「図書館学校教授」であったり、といったことから――に好奇心を抱き、遂には慶應義塾大学の「図書館学科」へと導かれ、子どもの本の世界で一生を送る結果になったのでした。

私のほかにも、これらの本を活用していた学生がいたのかどうかわかりません。あったとしても、きっとそう多くはなかったでしょう。あまり利用される見込みのない本を購入することが、はたしていい選択だったのかどうか、図書館の立場からすれば、考慮の余地があったところでしょう。でも、私はそれによって大きな恩恵を受けました。そして、だれだったのかわかりませんが、それらの本をそこに備えておいてくれた人に感謝しています。

もしかしたら、それは山下さんだったのかしら？と、今懐かしく思い浮かべる方があります。その人は、何人かいる図書館員のうちで、規則に厳しいことから、学生たちにちょっと煙たがられている方でした。返却日が遅れたときなど、私たちは、そっとカウンターを偵察して、山下さんが当番でないのを確かめてから返しにいく、などということをしていました。でも、今思い返すと、さりげなく新着図書を紹介してくれたり、私たちがたくさん本を借りるとうれしそうだったりと、ちょっと離れたところから、心にかけて私たちを見ていてくださったことがわかります。

そのときは何も思わず、当たり前のことのように享受していたことが、実は、だれかの配慮の賜物だったと、あとになって気づく――私のような年齢になると、そういうことがたびたびあるのですが、最近、若くてもちゃんとそのことに気づいている人たちがいると知って、たのもしく思ったことがありました。それは、将来児童図書館員になりたいと希望する若い人のために、私の図書館で企画した講座に応募した人たちの作文を読んでのことです。

応募者は、「子ども時代の読書の思い出」という題で作文を書くことになっていました。児童図書館員という仕事の基礎は、個人的な読書体験にあるからです。応募者たちは、作文を書くことで、改めて子どものときの自分をしっかりと振り返る機会をもったようでした。そして、興味深いことには、本と関わった場面をひとつひとつ具体的に思い出していくうちに、ほとんどの人が、その背後に自分と本との出合いを用意してくれた“人”が存在していたことに気づいたのです。

これらの作文の中には、子どもと本の架け橋になった大勢のおとなの姿が見えてきます。毎晩三冊ずつ本を読んでくれたお父さん、今でも耳に残る独特の声で絵本を読んでくれたお母さん、新しい本を神棚からおろして、特別の贈り物にしてくれたお母さん、本の話をゆっくり聞いてくれた文庫のおばさん、絵本を読んでくれた幼稚園の先生、思い出に残る本をすすめてくれた小学校の先生・・・自分は生来本好きだと思っていた人も、よく考えてみれば、それはまわりにいたおとなの配慮や、影響があってのことだったと気がつくのです。
特定の個人に結びつく思い出をもっていない人でも、近くに文庫があったこと、図書館があったことが自分と本との接点になっていたことに気づいています。しかも、それが単なる偶然ではないこと、そこにだれかの意思が働いていることを感じ取っています。たいへんうれしかったのは、それに気づいた若い人たちが、こんどは自分たちが子どもと本の仲立ちをする番だ、子どもが本と出合える場をつくる側にまわるのだと、書いていたことです。

私たちが図書館で自分にとって大きな意味をもつある本に出会うとき、私たちは、それをただ幸運と受け止め、ときには、その本を発見したことをまるで自分の手柄のように思ったりします。その背後に、その本をそこに置いた人――いつかだれかに読まれることを願って、それを選び、蔵書に加えた図書館員――がいたこと、さらには図書館そのものの存在を支えているもっと多くの人たちがいることに思いを馳せることはまずないでしょう。でも、実際は、そのような人々の願い、配慮、そして労働が、私たちと本との出会いを用意してくれていたのです。

もしかしたら、あなたが図書館で、一冊の本を手に取るとき、それをそこに置いた図書館員が、長い時間の向こうから、あなたににっこり笑いかけているのかもしれません・・・。

（東京子ども図書館機関誌「こどもとしょかん」101 号に収録のエッセイ「ひそやかなつながり」に加筆して転載）

＜研究室から＞

西田　直孝　音楽学科教授

最近とても忙しい毎日を送っています。そんな中で自分が、感じたこと知ったこと等を書いてみましょう。

一昨年から曲集の作製にかかっている「イタリアバロック集」が、前に進まずいつになったら完成するかわかりません。次から次へと無名の作曲家による気のきいた曲が出てきて、どの曲を編纂しようか迷うばかりの今日この頃です。イタリアからファクシミリ版の楽譜を注文すると非常に高額で最近の飲み代にもとても影響が出ています。

ルネッサンス・バロック・古典といった時代、音楽世界の中心は、イタリアでした。しかし多くのドイツ系音楽家は、ドイツ人中心の音楽史をたくさん作り上げました。我々は、作曲家というとバッハ・ヘンデル・モーツァルト・ベートーベン・シューベルト・シューマン・ブラームス etc といった作曲家を頭の中に浮かべます。イタリア人の様にラテン系の人達は、どうも音楽史のような系統立てた書を残す人が少なかったみたいです。そんなことでイタリア人の素晴らしい作曲家等でもあまり後世に残らず埋もれてしまっている場合が多いみたいです。そんな作曲家の作品を少しでも発掘して世に出したいものだと考えています。

次に音楽学生の楽譜に対する思いを述べてみましょう。最近の学生さんは、自分の楽譜を購入しないでコピーですましてしまう人がけっこう多いようです。我々が、学生だった頃、今日の様にコピー機が発達していませんでした。売られていない譜は、なんとか借りてきて手書きで写譜をしたものです。今でもこれらの譜は、私の宝です。当時私は、決して豊かな生活をしていたわけではありませんでしたが、勉強する売っている譜は、必ず買いもとめました。これら一冊ずつの楽譜は、レッスンの折先生に指摘していただいた事の書き込み、又は、先生自ら書いていただいた事等、貴い愛情のあるとても大切なものなのです。一曲ずつの思いのある音楽は、楽譜の中に宿っています。本来楽譜はフォトコピーしてはいけないのです。

私が、学生時代に先生からギリシャの四学ということを学びました。その昔ギリシャでは、学問のことを哲学ともいったそうですが哲学・歴史・数学、そして音楽（楽器を演奏する）を学んだそうです。哲学は、色々な方向から物を考え、歴史は、古今の出来事から学び今日からの生き方を考える。音楽は、楽器を巧みに操る鍛錬をして自分の音楽を作り出す。数学とは、私にとって頭の鍛錬であり計算としか思っていませんでした。しかし先日ある対談集を読み勉強になったことがあるのです。指揮者の小澤さんが、数学者の広中さんに数学とはどんな学問なのかと尋ねると、彼は、想像する学問であるとおっしゃっていました。頂点に立つ様な数学者は、違うものだと思い、それ以上に学問とは、結局の所想像又は創造に通じるものなんだということを認識しました。

＜図書館員の推薦図書＞

井出　敦子　大学図書館閲覧係

井上靖　『星と祭』
（『井上靖小説全集』第３２巻）　新潮社、1975 年　850.8/IN2/V.32
（『井上靖全集』第２０巻）　新潮社、1996 年　850.8/IN2B/V.20　（注１）

前号、Veritas No.26 に推薦図書の原稿を寄せて下さった音楽学部の中村健先生から、図書館員も図書の紹介をという宿題をいただいておりました。そこで今回はお気に入りの本と出会うこと、そして、そのお気に入りの世界の広がりの中で図書館を使うことについて、少しお話をしてみたいと思います。

『星と祭』は、別れた妻のもとに引き取られ、現世での縁の薄かった娘を琵琶湖のボート事故で亡くした主人公の心の軌跡を描いた長篇です。湖から遂に遺体があがらなかったことで長い長い殯（もがり）の歳月を過ごした末に、ヒマラヤでの月見、そして湖のほとりに点在する、さまざまな歴史を背負った十一面観音との出会いを通して、娘と一緒に事故に遭った青年の父親とのわだかまりを超え、事故から８年目、春の満月の夜、共に湖に弔いの船を出すことによって娘が鬼籍に入ることを受け入れるという物語です。

この物語にどうして心惹かれたのか、それはよくわかりません。ただ、自分の心のどこか奥深いところが覚醒する、読み返す度にいつもそんな感覚を経験して来ました。いつの頃からか、この物語を読んだり思い出したりすると、頭の中でショパンのピアノ曲が聞こえるようになりました。特に物語の最終章「桃と李」、湖での弔いに観音さまたちが次々に立ち現れるという幻想的な場面、私にはピアノ協奏曲第１番の２楽章１０５小節目からの、あの星が降り注ぐかのような旋律と切り離しては存在し得なくなっています。（注２）

時を置いて、ほんの少しずつではありますが、私も主人公の、そして著者の足跡（注３）を辿る湖国巡礼の旅を続けています。文中の記述から計算して、近江八幡にある長命寺に「もしかして今年はご本尊ご開帳の年ではありませんか」と問い合わせる電話をかけ、お寺の方をびっくりさせてしまったこともありました。その部分はフィクションだったのでしょうか。

著者が湖国へ足を運ぶようになった頃、十一面観音を始めとする仏像の多くは、ひっそりと里の人に守られ、来訪者が簡単に対面できる状況ではなかったようで、そのあたりの苦労が物語の中にも描かれています。けれども、この物語が世に出たことがきっかけとなって、こうした仏像を巡る環境も一部整備されて来ています。

『井上靖小説全集』第３２巻の付録（注４）に収録されている福田宏年氏の「解説」によると、新聞連載終了後に単行本としてこの『星と祭』が刊行された折には、あまり文壇ジャーナリズムに取り上げられることがなかったようです。しかし同氏の「そうした作品の幸不幸は、長い間には時間が訂正して行くのであろう」の言葉通り、湖畔の十一面観音をめぐる人々の物語世界は、これからも綴られて行くに違いない・・・。この記事を書くにあたって、一度見ておきたいと訪ねた晩秋の「観音の里」高月町・出会いの森に立つ町立図書館「井上靖記念室」で、ゆかりの品々を眺めながらそう確信したのでした。（注５、６）

お気に入りの一冊は、普段は忘れていても、機会ある毎に何か新しい喜びをもたらしてくれる、人生の友となります。みなさまと本とのそんな出会いを、図書館は応援したいと思っています。

[注＝図書館員的補足]

（１）　この全集は現在でも購入可能ですが、厚くて重くて高価です。湖国への旅のお供にはご自分で角川文庫版をご購入になることをおすすめします。

図書館では長期に亘る利用と保存のことを考えて、資料の購入に際しては、基本的にハードカバーを入れるようにしています。図書館で見つけて「マイ・ブック」が持ちたい、と思われたら Books.or.jp[本をさがす] http://www.books.or.jp/ で探してみましょう。文庫本を含め、現在入手可能な版がわかります。

（２）音楽学部図書室で音楽学部所蔵の音楽 CD/LD/DVD を視聴することができます。貸出はしていません。音楽学部図書室のパソコンで検索してみてください。

で、ショパンのピアノ協奏曲第１番ホ短調作品１１、人気曲だけあっていろいろな演奏家たちの CD が入っています。私の大好きな Krystian Zimerman（ショパンの母国ポーランド出身のピアニスト、１９７５年のショパンコンクールに当時最年少で優勝。読み方が一定していないのでアルファベットで表記しました）が１９９９年、自らポーランド祝祭管弦楽団を指揮しながら演奏した時のものもあります。

（３）　著者自身の十一面観音歴訪については「美しきものとの出会い」ほかの美術エッセイをご参照ください。

『井上靖全集』第２５巻　新潮社、１９９７年　850.8/IN2B/V.25

（４）　文学全集・著作集などの場合、その最終巻の隣に「月報」、あるいは「付録」と書かれた冊子が並んでいる、そんなことが結構あるのをご存知でしょうか。配本ごとに、その巻に収録されている作品の解説などが書かれた小冊子が付いて来るものがあるのです。それを刊行終了後に図書館で簡易製本しています。作品成立の舞台裏など、興味深い記事も含まれていたりします。お見逃しなく。

（５）　湖のほとりの仏像については下記をご参照ください。

『十一面観音』　（『魅惑の仏像』７）　毎日新聞社、１９８６年　730.8/MA1/V.7
『日本の仏像　＜滋賀＞』　（『仏像集成』４）　学生社、１９８７年　730.8/GA1/V.4

（６）　図書館新館の新着図書棚の下方のラックには、『論集』を始め神戸女学院大学の学内出版物の最新号が集めてあります。また、創刊号からの Veritas　をプリントアウトしたファイルも置いてあります。新着図書チェックの折にどうぞご覧になってみてください。

Veritas　のファイルと一緒に、おすすめのお弁当を含む湖国おでかけ情報のファイルも置いておきますので、よろしかったらこちらもどうぞ。

＜「原千恵子写真展」によせて＞

井原　麗奈　大学院文学専攻科２年生

私たちは、2001 年に刊行された『原智恵子　伝説のピアニスト』（石川康子著・ベスト新書）という伝記を読み、原智恵子という日本の洋楽黎明期に大きく貢献した偉大なピアニストが、実は神戸出身であったこと、そして神戸女学院で教鞭をとられていたことを知り、興味を抱きました。しかし、伝記の中では原先生の関西での活動に関して、多くはふれられていなかったため、私たち学生がその足跡を辿ってみたいと思い、この写真展を企画した次第です。

原智恵子先生は、神戸・須磨区出身。13 歳でパリに留学し、日本人初のショパンコンクール入賞を果たされるなど、日本の洋楽黎明期に多大なる影響を与えた方です。1957 年から４年間本学で教授を務められていました。2001 年に亡くなられましたが、同年に伝記が創刊され、大きな注目を集めています。戦前・戦後の時代に一世を風靡した名ピアニスト原智恵子先生の 3 回目の命日を前に、そのお人柄や、関西を拠点にどのような活動をされていたのか、など地元とのつながりに焦点をあてて、面影を偲びたいと思います。

展示写真の内容は、13 歳で渡仏する船中の様子や、有島生馬の描いた肖像、神戸女学院音楽学部教授就任披露演奏会などのほか、初公開の直筆の手紙やパリ修行時代の楽譜などの資料も展示いたします。原智恵子先生の生い立ちから晩年に至るまでの激動の人生をたどります。

またとない機会ですので、神戸の誇れる名ピアニストの足跡を見直し、感じ楽しんで頂ければ幸いです。

原智恵子　写真展

日時　：　2004 年　12 月 1 日（水）～　12 月 22 日（水）
　　9：00　～　16：00　（土日祝日　休館）
場所　：　神戸女学院大学図書館本館閲覧室・ギャラリー
入場料　：　無料

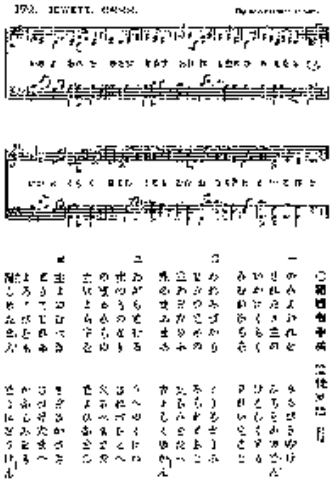
主催：神戸女学院大学アートマネジメント研究会
後援：神戸女学院大学図書館
協力：神戸女学院史料室

＜オルチン文庫にある「讃美歌集」について　その十(最終回)＞

茂　　洋　本学名誉教授

『新撰讃美歌』（69）には、数多くの特色ある讃美歌がありますが、その中で四つ上げてみましょう。

６９－１７２



この讃美歌は、『新撰讃美歌』に初めて登場したものです。英語の讃美歌には、1862年に挙げられています。そこからの訳なのですが、誰が訳したのかは分かりません。曲は、ウエーバーのオペラ「魔弾の射手」の序曲にあるホルン四重奏のものです。原詞は、Horatius Bonar, ” Thy way, not mine, O Lord!” 1857　です。歌詞だけの『新撰讃美歌』（64）にあった第五節は、ここでは省略されています。

６４－１７２（省略された節）

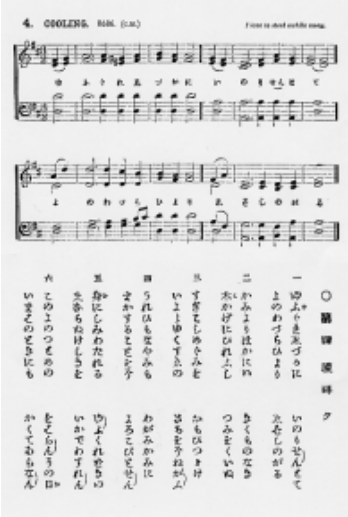
第五節　主よみづから　わがみちびき
　　われのちから　智慧ともなり
　　わがことごと　みなまもりね
　　よわきわれも　まよひはせじ

この讃美歌は、よく愛されて、「主よ、み手もて」となって、1954 年の『讃美歌』285、そして 1997 年の『讃美歌 21』504 に受け継がれています。

＊　　＊　　＊

次に６９－００４を見てみましょう。

６９－００４



　　この讃美歌の原詞は、米国宣教師ブラウンのお母さんの作です。早くから、各教派で独自に訳されていたらしく、ここに登場するまでに三種の異なる歌詞が採用されていました。明治十年 メソジスト教会の讃美歌集２８－０８に登場している「ちぢのおもひなくゆふべのときに」と、『七一雑報』六巻三十五号（明治十四年九月二日）に「新譯讃美歌」として発表され、そのまま組合教会の讃美歌集１５－５９に採用されている「われしばしいでて　うきみをのがれ」と、メソジスト教会とバプテスト教会の讃美歌集（３１－２２と４０－２２９）に同じ訳で出ている「たそがれしづかに　よごころさり」です。いづれも訳詞者は不詳です。

ここで採用されている訳は、植村正久のもので、『女學雑誌』第六十七号（明治二十年七月十六日）に掲載されたものに少し手を加えたものです。また楽譜のない『新撰讃美歌』（６４）では七節ありましたが、69 では、第五節を削減して六節にしています。

次の６４－００４の第五節は省略されています。

　　うきよのあらしに　ただよふときも
　　天のひかりをみて　いよよいさむ

女學雑誌　第六十七号では、第四節は「うれへもなやみも　わがあいする　かみにまかせてや　やすからまし」となっていました。

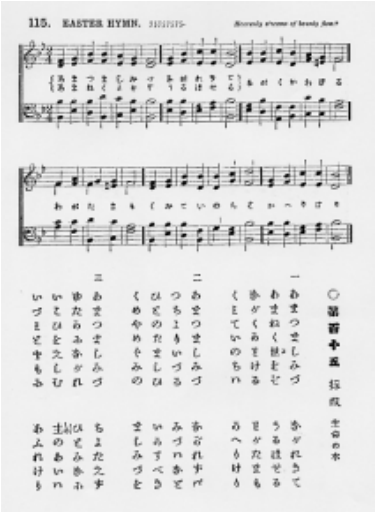
またこの讃美歌は、島崎藤村の『若菜集』の「逃げ水」に巧みに用いられています。「ゆふぐれしづかに　ゆめみんとて　よのわづらひより　しばしのがる　きみよりほかには　しるものなき　花かげにゆきて　こひを泣きぬ」　讃美歌の歌詞が、見事な恋の歌に変わっています。

この讃美歌は、1954 年の『讃美歌』319 に受け継がれましたが、1997 年の『讃美歌 21』には取り上げられていません。

＊　　＊　　＊

次に６９－１１５を見てみましょう。

６９－１１５



この讃美歌は、松本（長井）えい子の作品で、３１－１５０に掲載されましたが、その後松山高吉が大幅に改作しました。この両者をくらべると、よく分かるように、殆ど元の詩が残されていませんね。

３１－１５０

１あまつましみず　ながれきて
　よにもわれにも　あふれけり
　ながくかはける　わがたまに
　よのみずいかで　たりぬべき

２あまつましみず　のみてこそ
　わがたまはまた　かはかざれ
　きみのめぐみは　われにこそ
　つきぬいずみと　わきいずれ

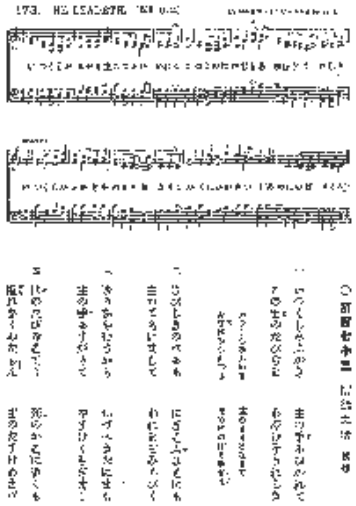
３あまつましみず　貴ときかな
　たゆるせもなく　かぎりなし
　そのましみずを　いくちよも
　くみてたのしく　われはのまん

この讃美歌も、島崎藤村の『若菜集』の「若水」に巧みに用いられています。
　くめどつきせぬ　わかみづを　きみとくまま し　かのいづみ
　かわきもしらぬ　わかみづを　きみとのまま し　かのいづみ
　かのわかみづと　みをなして　はるのこころに　わきいでん

この讃美歌もよく好まれて、1954 年の「讃美歌」217、1997 年の「讃美歌 21」404 に受け継がれています。

＊　　＊　　＊

最後に取り上げたい讃美歌は６９－１７３です。
６９－１７３



この讃美歌は、すでに３１－１２１と４０－２２６（同じ歌詞）に訳出されてあるものをもとにして、松山高吉が訳し直したものと考えられますが、ここも殆ど原形をとどめないほど手が加えられています。「松山高吉氏が一字一句翻訳せし詞」として、彼の葬儀の時に歌われています。
1954 年の『讃美歌』294、1997 年の『讃美歌 21』461 に受け継がれています。
原詩を挙げておきます。

1　He leadeth me! oh, blessed thought,
Oh, words with heavenly comfort fraught!
Whate'er I do, where'er I be,
Still 't is God's hand that leadeth me.

Refrain.
He leadeth me! he leadeth me!
By his own hand he leadeth me;
His faithful follower I would be,
For by his hand he leadeth me!

2　Sometimes 'mid scenes of deepest gloom,
Sometimes where Eden's bowers bloom,
By waters still, o'er troubled sea,
Still 't is his hand that leadeth me!---REF.

3　Lord! I would clasp thy hand in mine,
Nor ever murmur nor repine;
Content whatever lot I see,
Since 't is my God that leadeth me.---REF.

4　And when my task on earth is done,
When by thy grace the victory's won,
Ev'n death's cold wave I will not flee,
Since God through Jordan leadeth me.---REF.

J. H. Gilmore.

＊　　＊　　＊

『新撰讃美歌』には、このように多くの魅力ある讃美歌がありますので、今後さらに多くの研究のなされることを願っています。その資料として、『新撰讃美歌資料集』（神戸女学院『新撰讃美歌』研究会発行、１９９３）があります。これは、『新撰讃美歌』の一つ一つの讃美歌の資料をまとめたものです。その資料を元にして、神戸女学院大学の先生方がそれぞれ研究した論文集が、『『新撰讃美歌』研究』（新教出版社発行、１９９９）です。また『新撰讃美歌』の一つ一つの讃美歌の資料と解説を加えたのが、下山嬢子『新撰讃美歌』、新日本古典文学大系　明治編１２（岩波書店発行、２００１）です。今後の研究のために用いて下さい。　　完